

## II 学校の生活

## 1 学校の1日

教師には様々な仕事があります。授業はもとより、校務分掌や行事の準備、けがの対応などの緊急対応もあります。何より、児童とともに過ごす時間を確保することが大切です。登校前や下校後の時間を活用して、少し工夫をすることで、限られた時間を使いこなすことができます。

## ある小学校の例

8:30	登校指導
8:45	朝の会
	授業
10:20	中休み
10:40	授業
12:15	

児童にとって、登校したときに教師や友達と交わす明るい挨拶が、その日の元気の源となります。子供たちの反応からは、その日の体調や気分、登校前の様子が見えています。

教室では、一人一人顔を見ながら、名前を呼んで出席確認をします。健診結果を行い、必要に応じて養護教諭や学年の教員に連絡します。連絡がないまま登校を許さない児童がいた場合は、すぐに保健室へ連絡します。連絡が取れない場合は、速やかに保健室や学年の教員に報告し、情報を共有します。

中休み(20分)には、校庭で児童と一緒に遊ぶようにしましょう。時には、教室の窓から校庭の児童の様子を観察して、友人関係を確認することも大切です。

学習指導の出発点は、児童の実態を知ることから始まります。学力や体力のほか、友人関係も把握しておくことが大切です。

年間指導計画を踏まえて作成した週ごとの指導計画に沿って授業を展開していきます。学習指導要領に基づき、児童に身に付けてさせたい力を明確にした学習指導案を作成することが大切です。

12:15	給食指導
12:50	昼休み
13:05	(清掃指導)
13:20	授業
14:55	
15:10	帰りの会
16:45	放課後

食育の観点を踏まえた給食指導を行いましょう。教卓を全体を見渡しながら食べるのも大切ですが、生活環を回って、児童と一緒に食事をすると、その会話の中から、多くの情報を得ることができます。また、授業では見せない児童の様子から、友人関係の変化を知ることもできます。

清掃指導では、児童と一緒に清掃をしながら、当番活動の役割と働くことの意義を理解させることができます。教室にゴミが落ちている、黒板に落書きがあるといったような状況を放置すると、学級経営が難しくなる可能性があります。また、教室・トイレ・廊下・特別教室・黒板・壁などの破損箇所は、気が付いたらすぐに修繕します。

帰りの会では、一日を振り返り、明日の学習や生活の見直しをもたらすとともに、下校の際に気を付けることについて、一声掛けましょう。

児童が下校しても、校務分掌や学級事務、学年会等、様々な校務があります。優先順位を付けて、一つ一つ確実に実践していくことが大切です。分からることは上司や同僚にアドバイスを求めましょう。

東京都の学校には、校長、副校長、主幹教諭、指導教諭、主任教諭、教諭といった職があり、それぞれに果たすべき職責があります。一人一人がその職責を果たすことによって、組織的な学校運営が可能となります。



- 5 -



## 学習指導

- 文部科学省が定めている学習指導要領を基準として、各学校では教育課程を編成しています。学習指導要領を常に身近に置き、様々な機会に内容を確認してください。
- どの教科のどの単元も、児童の実態をしっかりと把握することが大切です。そのためには、日頃から、児童の学力や体力の状況、人間関係、休み時間の過ごし方など、実態を把握するための資料を集めておくといいでしょう。
- 新しい単元に取り組む際は、関心・意欲を高めるための導入の工夫が必要です。多様な情報などから、最もよい材料を選んで導入の工夫に生かしましょう。
- 授業の「ねらい」を明らかにしましょう。児童がそのねらいを達成できたことを認識できなければ、「ねらい」が明らかな授業といえません。先端教師の授業観察ができる機会には、その授業でどのように「ねらい」に迫ろうとしているかという視点から授業を観察する参考になります。
- 授業の「ねらい」と学習の「めあて」が適合していることが大切です。そのためには、学習カードなどを役立ちます。
- 1単位時間の学習の中で、場面に合った言葉遣い、声の大きさ、身体の動きなど様々な工夫が必要です。そのような工夫により、児童の集中力が高まります。
- 学習内容と生活体験とが関連付けられると、児童の理解が大いに深まります。
- 「どう教えればいいのだろう。」と悩んだときは、児童を個別指導する中で、つまずきやすいポイントを明確にしながら、指導方法を改善していきましょう。
- 児童に学習による「達成感」を味わわせるためには、授業の中で思考し、発信する場面を、適切に設定することが必要です。

常に学び続け、自分を磨き、指導力を高め、子供たちの学力・体力を伸ばし、豊かな心を育てること。



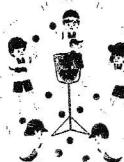
## 学校行事

## &lt;儀式的行事&gt;

- 儀式的行事は、全校の児童及び教職員が一堂に会して行う教育活動であり、入学式・卒業式はもちろん、始業式・終業式のほか、朝会などが考えられます。児童にその場にふさわしい態度を身に付けさせる機会として重視しましょう。場にふさわしい言動の在り方は、各発達段階でしっかりと身に付けさせてていきましょう。

## &lt;文化的行事・健康安全・体育的行事&gt;

- 学芸会や運動会などの行事は、児童一人一人に明確な「めあて」をもたせることが大切です。何のために取り組む行事であるかを、担任がしっかりと説明しましょう。
- 学芸会や運動会等の当日は、学習の成果を発表する場として大切です。しかし、そこに至るまでの工夫や努力など、行事に取り組む過程で児童は多くのことを学びます。それぞれの行事のねらいを達成できるよう指導していくことが大切です。



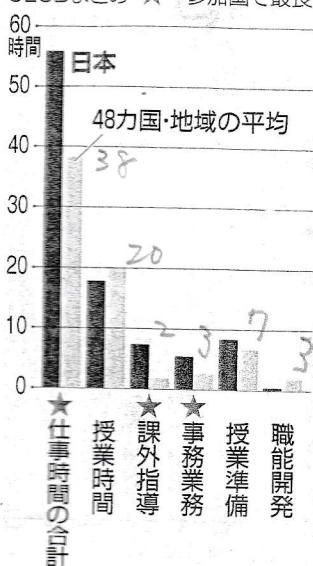
子供たちの「未来」をつくるのは「今」です。子供たちの「今」に、少しでもよい影響を与えることができたら、教師として本望だと思います。

# 教員進まぬ改革

## OECD調査

中学教員の1週間の仕事

OECDまとめ ★…参加国で最長



日本の小中学校の教員は他の先進国と比べて、仕事時間が最も長い一方、教員としての能力を上げるために用いている時間が最も短いことが19日、経済協力開発機構(OECD)の調査で分かった。文部科学省が自指す、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業を実施している教員も他国より少なく、「勤務状況」と「授業内容」の双方に課題が浮かんだ。

教員の長時間労働が問題となるなか、文科省は働き方改革を「待ったなしの課題」と位置づけている。また、小学校は2020年度から、中学校は21年度から新しい学習指導要領に基づく授業が始まり、教える内容や教え方も変革を迫られている。双方で課題が指摘されたことについて、文科省は「非常に深刻にとらえている。危機感を持って対応したい」としている。

OECDが公表したのは、18年に実施した国際教員指導環境調査(TALIS)の結果。欧米を中心とした加盟国など、中学校は48カ国・地域、小学校は15カ国・地域が参加した。日本は13年に続く参加で、全国から抽出した国公私立小中393校の教員と校長に質問を送り、回答を得た。その結果、中学教員の1週間の仕事時間は56・0時間で、前回調査より2・1時間長く、平均の38・3時間を大きく上回った。ただ、内訳をみると授業時間は18・0時間で、平均の20時間より短かった。代わりに▽部活などの課外指導(7・5時間)▽事務業務(5・6時間)は参加国で最長だった。授業準備

(8・5時間)も平均よりも長かった。小学教員は▽仕事を時間(54・4時間)▽事務業務(5・2時間)に加え、授業準備(8・6時間)も参加国最長だった。

一方、1週間で知識や専門性を高めるための「職能開発」に費やした時間は、小学で0・7時間、中学0・6時間。いずれも、参加国で最も短かった。

授業内容についてみると、「明らかな解決法が存在しない課題を提示する」指導を頻繁にしているのは小学15・2%、中学16・1%で、中学は参加国平均の37・5%の半分未満だった。「批判的に考える必要がある課題を与える」は小学11・6%、中学12・6%だった。どちらも参加国で最低だった。また、「課題や学級での活動にICT(情報通信技術)を活用させる」指導は、小学が24・4%、中学が17・9% (平均51・3%) だった。(矢島大輔)

# 学校現場 手いづばい

中学校教員は勤務状況と授業内容の双方で課題が浮かんでいた。文部科学省は「進めようとしている改革の周知」として、17年度から、課外指導の軽減も進めようとしている。だが、「待遇が制度化した」と見つかっても学校の教員は、「待遇が変わらない」と不満上がる。

## 業務減「すべには…」

経済協力開発機構(OECD)の調査で、日本の小長は言う。「待遇が変わらない」のが現状だ。

「部活動、親とのやりとりが減っている」「行政的な仕事…。日5年前の前回調査より仕事に理解のある人と限られた教員。「見つかって手間取る。教員の代わりには減らされない」ことだ。

(矢島大輔、編集委員・氏岡真弓) ▼1面参照

中学校教員は勤務状況と授業内容の双方で課題が浮かんでいた。文部科学省は「進めようとしている改革の周知」として、17年度から、「待遇が制度化した」と見つかっても学校の教員は、「待遇が変わらない」と不満上がる。

## 主張的な学び指導に遅れ

中学校教員は国内からも、「同じ仕事でも携わることを減らし、教員の権限はそれを引き受けた」と提言した。中央教育審議会は、「新たな指導は学びの質の向上に寄り切った」として、中央教育審議会は、「新しい指導は学びの質の向上に寄り切った」として、「校庭に直接関係する問題に対する合同の解決法を最も低いレベル。ICTを用いて語った。そのうえで、「子どもの場合は、日常生活や仕事での問題を引き立つことを示すため、日17・9%にとどまる。」

中学校教員の指摘は国内からも、「同じ仕事でも携わることを減らし、教員の権限はそれを引き受けた」と提言した。中央教育審議会は、「新たな指導は学びの質の向上に寄り切った」として、「校庭に直接関係する問題に対する合同の解決法を最も低いレベル。ICTを用いて語った。そのうえで、「子どもの場合は、日常生活や仕事での問題を引き立つことを示すため、日17・9%にとどまる。」

調査を行うわれたのは直後のことだ。2017年8月に緊急提携言を、同年12月には教員が増えたが、参加国は平均%、53・9%。前回調査より根幹部分。文科省の担当者は、「ラーニングの形は広がった」だ」と見る。日本のおじいちゅうの教員が、教員の授業觀が変わった。

OECDまとめ。頻繁に行ひてあると回答した教員割合は「C-A」と「C-T」を活用させることによって、1週間の間で職能開発にかかる時間は小学0・7時間で、ともに参加国の中では最も低い。

OECDまとめ。頻繁に行ひてあると回答した教員割合は「C-A」と「C-T」を活用させることによって、1週間の間で職能開発にかかる時間は小学0・7時間で、ともに参加国の中では最も低い。

OECDまとめ。頻繁に行ひてあると回答した教員割合は「C-A」と「C-T」を活用させることによって、1週間の間で職能開発にかかる時間は小学0・7時間で、ともに参加国の中では最も低い。

OECDまとめ。頻繁に行ひてあると回答した教員割合は「C-A」と「C-T」を活用させることによって、1週間の間で職能開発にかかる時間は小学0・7時間で、ともに参加国の中では最も低い。

OECDまとめ。頻繁に行ひてあると回答した教員割合は「C-A」と「C-T」を活用させることによって、1週間の間で職能開発にかかる時間は小学0・7時間で、ともに参加国の中では最も低い。